

新規就農という「選択」

新たな力が産地を動かす



農業に挑戦したい—。

転職という一大決心をして新たに農業経営を始める。

大きな希望と共に押し寄せる不安。

「この人たちがいたからこの産地に就農した」。

就農という夢への挑戦を支える先進農家とJAと行政がこの産地にいる。

だから、今は不安を超えて農業へのわくわくしかない—。

そんな思いからスタートした新規就農。

今では親元後継者と共に技を競い合い、高め合う大切な仲間に。

前職の知識と経験をうまく生かしながら産地の新たな原動力として活躍する。

新規就農へのそれぞれの思いを聞いた。

**当JA管内で
100人が独立就農
全国に誇る育成先進地**

「ニユーファーマー（新規就農者）」とは、非農家出身で、異業種から農業を起業する人たちです。

当JA管内では、これまで100人（伊豆太陽地区4人・三島函南地区12人・伊豆の国地区83人・なんすん地区1人）のニユーファーマーが独立して就農。産地の新たな担い手として活躍し、その数は毎年増え続けています。

ニユーファーマーは静岡県の「がんばる新農業人支援事業」などを通じて、研修受入農家の下で一年

間の実践研修を実施。栽培技術や農業経営を学びます。
研修受入農家は、静岡県知事認定の農業経営士などの資格を持ち、産地で先進的な農業を実践しています。伊豆の国地区では7人の受入農家の内、イチゴ2人とミニトマト3人が、自身がニユーファーマーとして、学んだ技術と新規就農をした経験を教え伝えています。

地域（受入）連絡会を設置

就農前から就農後も支援

ニユーファーマーを支援する体制として、JAは伊豆の国地区と三島函南地区にそれぞれ「ニユーファーマー地域（受入）連絡会」を設置しています。構成員はニユーファーマーと研修受入農家、JA、市町、県東部農林事務所です。

地域（受入）連絡会では、

- ・就農計画の作成支援
- ・栽培農地の確保・あつせん
- ・就農地の借地契約の支援
- ・労働力確保のため無料職業紹介
- ・出荷物の販売

所で農作業パート者紹介

・就農後の當農業指導と經營指導

など、就農前の受入支援から就農後の一括まで、「農地・資金・販路」の全面的なバックアップ体制を整えています。

研修後は研修受入農家の近くで

独立就農し、生産組織や青壯年部

に所属。日々相談しやすく、情報交換ができる環境を整え、ニユーファーマーが孤立することなく、産地全体の支援により安定した農業経営を実現しています。

**産地維持・発展に貢献
ニユーファーマーが活躍**

伊豆の国果菜委員会は、57人全員がミニトマトのニユーファーマーです。現在は県内一の生産量で、販売高約12億円をあげています（令和3年度）。静岡県の「しづおか食セレクション」にも認定されています。一方、伊豆の国芋委員会では販売高約16億円の内の約29%がニユーファーマーの販売高で、栽培面積は同委員会全体の20.7%になります（令和2年度数値）。ニユーファーマーの平均栽培面積は28アールで、全生産者の平均栽培面積20アールを上回っています。生産者の高齢化により生産者数や栽培面積が減少する中、ニユーファーマーの増加が産地の維持・発展を支える大切な力になっています。

8月の「いちごサミット」では、管

内各イチゴ産地の生産者が集ま

り、今後のJAふじ伊豆の産地振興策を検討。その中で、新規就農受入体制構築が進んでいます。

伊豆の国地区的な現況を紹介し、産地の維持・発展には新規就農者の受け入れが重要として全地区への横展開を目指しています。

ニューファーマー数
令和4年11月取材時

就農地区	作物	人数
伊豆太陽	イチゴ	4
	大玉トマト	6
	ミニトマト	1
	露地作物	2
三島函南	イチゴ	2
	水稻	1
	ミニトマト	57
	イチゴ	24
伊豆の国	ワサビ	2
なんすん	イチゴ	1

*県の研修制度や青年等就農資金など農業融資を活用し、独立就農後にJA生産組織に所属している方。



ニユーファーマー地域（受入）連絡会にはニユーファーマーと研修受入農家、県・市・JA職員が出席。意見交換会では栽培や経営の悩みなどを話し合う

JJA管農アドバイザー（右）も栽培支援



横展開を目指しています。

受け継がれる 産地の技と心



研修受入農家
ほりい かずお
堀井 一雄さん(65)

伊豆の国市在住。イチゴ「からび香」20アール・「紅ほっぺ」85アール栽培。伊豆の国苺委員会所属。平成17年からニューファーマー研修受入農家を務める。

「ユーファーマー育成は『人づくり』 ～堀井さんの思い～

伊豆の国市の堀井一雄さんは代々続くイチゴ農家で、ニユーファーマーの研修受入農家です。これまで20人以上を育成。受入農家になる大きなきっかけは、32歳の時に農業短大生の研修を受け入れ、「人づくり」の喜びを感じたことだと当時を振り返ります。

「最初は貧弱だった子が仕事を

任せて2か月で人が変わりました。一人前になるその姿を間近で見て、「人づくり」の喜びを実感し、だから今でも続けています。

成功の秘訣は技術だけでなく 地域に根差すこと

堀井さんが「ユーファーマー」に伝えたい大切なことは、「農業は面白い。農業を楽しみ、挑戦する」と力強く言います。堀井さんは自身、今も新たな挑戦をし続け、その姿は研修生にもしっかりと伝わっています。

会社員時代とは違つて農業は自らが経営者であり、すべてが自分の責任となります。「だからこそ、イチゴの管理も従業員の管理も自分が大切」と話します。

研修では高設栽培で、面積30アールを経営モデルとして指導。栽培技術があれば、良いものが採れて単価も上がる。それには基本の植物生理がしっかりと分かっていることが大切」と話す堀井さん。基本がしっかりといれば、温度や気候が変わつても応用でき、工夫や挑戦もできると伝えていました。

地域の方々にかわいがつてもらうことが大切だと言います。

「自ら声をかけ、青年部や先輩生産者、JA職員と顔見知りになれることで、いざという時に仲間が共に考え助けてくれる。一人きりではない」そう語る堀井さんも自然災害で仲間に助けられ、自分自身も仲間の窮地に駆け付けます。

産地の今後を見据え「JAや行政にはぜひ独自の新規就農への助成金を検討してほしい。少しでも農業に絶対はない。まずは基本に忠実に、ある程度の水準に達したら工夫してオリジナルを出してみたい」と期待を寄せています。

産地維持へ 担い手育成側となり 恩返しを

そんな堀井さんの下で育つた第一期生が佐々木毅さんです。佐々木さんは東京都出身で前職は繊維メーカーで研究職として勤務し、平成18年に独立就農しました。

佐々木さんは堀井さんから教わった「3K」を今も実践。「よく『観察』し、何をするべきか『考案』し、行動』すること。それが今の高品質生産につながっています」



ニューファーマー・研修受入農家
ささき たけし
佐々木 毅さん(50)

伊豆の国市在住。東京都出身。イチゴ「紅ほっぺ」を22アール栽培。堀井さんの下で一年間研修し、平成18年にイチゴで新規就農。伊豆の国苺委員会所属。令和2年からニューファーマー研修受入農家に。

「新規就農」という「選択」～ いつぱい

伊豆としてイチゴの大産地になれば面白い」と期待を寄せます。佐々木さんは仲間や企業と連携し、常に新しい栽培方法に挑戦しています。「農業は天職。今が楽しくてしょうがない。90歳まで作り続けたい」と夢を語ります。



ニューファーマー(研修生)
のだ こうたろう
野田 幸太郎さん(42)

伊豆の国市在住。沼津市戸田出身。前職は介護施設。令和4年9月から一年間佐々木さんの下で研修中。

高齢化による生産者減少の分、新規就農者を増やしていくことが大切だと話す佐々木さん。全国で新規就農者の育成制度が整つ中で、この産地が魅力ある産地として選ばれ続けることが重要と話します。

「当産地にはイチゴの長い歴史があり、新規就農の成功者がたくさんいる。全国で半数以上が新規就農を失敗する中、この成功者はすごいこと。ここには高い技術と個性豊かな生産者が大勢いて、新規就農を受け入れてくれている。堀井さんだからこそ人が集まり、これだけの担い手が育っている」

そう語る佐々木さんはJAに対し、「他地区的産地と連携して全体のレベルアップを図り、スケールメリットを生かしたブランド作りで付加価値をつけた販売へ。JAふじ

渡邊さんは「今は農業を始めるわくわくしかない。教え子みんなから応援をもらい、楽しみにしてくれている。支えてもらつた方々にイチゴで恩返しをしていきたい」と希望に満ち溢れています。

野田さんは前職が県外だったことから、農業を通じて家族や親せきとのつながりを大切にしたいと、就農を決意。佐々木さんからイチゴファーストの栽培の大切さを学び、科学的に物事を追求し全心に

産地維持には担い手を育成 選ばれる産地であり続ける

理由があつて必要性を教えてくれる姿を尊敬していると言います。野田さんは「地元のイチゴがさらにブランディングし、魅力ある地域になる」と。おいしいイチゴ作りで貢献できれば」と夢を語ります。

新規就農を通じて、笑顔で夢を語る4人の皆さまの姿はまさに農業を楽しむことを実践。産地の技と心は新たな担い手と融合し、脈々と受け継がれています。



栽培の情報交換を行う研修受入農家と研修生、営農アドバイザー



伊豆の国市在住。沼津市戸田出身。前職は介護施設。令和4年9月から一年間佐々木さんの下で研修中。

伊豆の国市在住。東京都出身。前職は東京都の小学校教員。令和4年9月から一年間佐々木さんの下で研修中。

そんな堀井さんの下で育つた第一期生が佐々木毅さんです。佐々木さんは東京都出身で前職は繊維メーカーで研究職として勤務し、平成18年に独立就農しました。

佐々木さんは堀井さんから教わった「3K」を今も実践。「よく『観察』し、何をするべきか『考案』し、行動』すること。それが今の高品質生産につながっています」

今も師弟関係が続く堀井さん(右)と佐々木さん。堀井さんは「これだけの技術をもっているからぜひ規模拡大」と佐々木さんに期待を寄せる